

オーケストラ シンフォニカ 東京

第 31 回

定期演奏会

平成 2 年 4 月 23 日 (月) 午後 6:30 開演

渋谷 東邦生命ホール

〔JR: 渋谷駅南口東側より徒歩 5 分〕



プログラム

第 1 部

指揮：石黒 不二夫

交響詩 木曾川の印象 op.8

清水 保雄

民謡 調間奏曲

平山 英三郎

茜（あかね） op.63

武井 守成

「荒城の月」による変奏曲

藤掛 廣幸

第 2 部

三つのギターの為のトリオ op.12

F. グラニャーニ

第1楽章 アレグロ

第2楽章 主題と変奏

第3楽章 メヌエット

第1ギター 山本 雅三

第2ギター 宮本 紀子

第3ギター 西原 正

四重奏曲 二長調 op.128

C.ムニエル

第1楽章 アレグロ・デチーゾ

第2楽章 カンツォネッタ・アンダンティーノ モツ

第3楽章 アンダンテ・エスプレッシーヴォ

第4楽章 ロンド・アレグロ モツ

第1マンドリン 肥沼 成明

第2マンドリン 宮崎 泰行

マンドラ 岩片 順子

マンドチェロ 宮本 皓永

ギター 今津 章

〔休憩〕

PROGRAM

第 3 部

指揮：石 黒 不二夫

編曲：赤 城 淳

「劇場支配人」序曲 K.486

W. A. モーツァルト

コンチェルト(シンフォニア) 田園風

A. ヴィヴァルディ

ペルシヤの市場にて

A. W. ケテルビー

第 4 部

指揮：石 黒 不二夫

合唱：ユーフォニック合唱団

グランドファンタジー 麥 祭

第1楽章 黎 明

M. マチョッキ

第2楽章 楽しき目ざめ

第3楽章 麥の歌(合唱付)

第4楽章 祭のあと(合唱付)

加除式法規書・法令解説書出版

中央法規出版株式会社

本社 〒151 東京都渋谷区代々木2-27-4 電話(379)3861(代表)
営業所 札幌・仙台・岐阜・大阪・広島・福岡

山本ミュージックコーナー

〒164 中野区東中野1-43-7 JR東中野駅東口南下車3分 TEL(363)9893

取扱品目

★手工マンドリン・ギター各種

★各社マンドリン・ギター

★マンドリン・ギター用弦及附属品

お気軽にお立寄り下さい。

マンドリン教室

平山英三郎先生

ギター教室

平山英三郎先生

曲 目 解 説

第 1 部

交響詩 木曾川の印象 op.8

清水 保 雄 (1910-1980)

作者は、昭和15年から47年まで32年の長きに亘り、明大MCの指揮を続ける傍ら作曲にも専念し、代表作としては「飛鳥」「アイヌの印象」「額田女王」などがあります。この曲は昭和50年の春、木曾路を訪れた際の印象をまとめて、昭和51年に作曲されました。昭和55年惜しくも他界されましたが、以下は作者がこの曲に寄せた詞です。……………木曾川はアルプスの山々から、小川の水を集めて、深い谷を悠々と流れ、長野、岐阜、愛知と3県をめぐって長い旅を続ける。日本ラインと呼ばれる頃は、竿をあやつる船頭によって旅人は景観に案内され、心を奪われ、忽ち犬山の淀に着き、更に川は大きく濃尾平野を潤して、大きく回って桑名から海へ注いでいる。……曲想はすべてこの詞に表されております。

民謡調間奏曲

平 山 英三郎

作者は早稲田大学在学中、マンドリン楽部に在籍、演奏指揮に当り、今日迄マンドリン・ギターの指導及び作曲家として活躍されています。砧会を主宰され、又当楽団の特別会員として今夕の演奏に参加されるなど、喜寿をお迎えになられても益々矍鑠としておられます。

この曲は昭和10年の作、日本の民謡を基調とした情緒あふれるメロディーで構成されています。

歯(あかね) op.63

武 井 守 成 (1890-1949)

作者は当楽団の前身であるオーケストラ シンフォニカ タケイ (OST) の創設者で、宮内省の要職にありながら楽団の育成と作曲に専念し新楽の発展に貢献されました。最終作品 No. は114。

この曲は昭和17年の作、同年5月の OST 定演で作者自身の指揮により初演されました。導入部6小節4/4以後2/4拍子作者の言葉……………タンゴでもハバネラでもない。赤い淡日さす頃の感情を音にうつしたまで……………。

「荒城の月」による変奏曲

藤 掛 廣 幸

作者は作曲・編曲・指揮・シンセサイザー演奏と幅広く活躍中で、国際エリザベート音楽コンクール・作曲部門グランプリ受賞(管弦楽「縄文譜」)の外、数多くの作曲コンクールに入賞、又欧州各国でT/V出演・レコード発売・楽譜出版など業績は多岐に亘っています。代表的な作品はパストラール ファンタジー (JMU 第1回作曲コンクール入賞作)・グランド シャコンヌ・スタパート マーテルなどがあります。

この曲は昭和56年12月から57年1月にかけて作曲され、原形を留めない程の変奏によって全く新しい曲になっています。序奏の後、ラテンリズムで始まる変奏、躍動するリズムとフォルテシモの激しさを経て、アンダンテ・カンタービレの情感あふれる変奏に移り、最後に「荒城の月」のテーマを歌声付で締括っている発想と情感の見事な曲といえます。

第 2 部

三つのギターのためのトリオ op.12

F. グラニャーニ (1767-1812)

フィリップ・グラニャーニは1767年イタリアに生れたギタリスト・作曲家で、パリで活躍し1812年歿しました。ギターの大先輩カルリの弟子と言われ、ギターソロ・デュオ・トリオそして室内楽曲を多く作曲しています。特に「ヴァイオリンとギターのためのソナタ」は、マンドリン独奏としてもよく演奏されています。どの作品も、古典的で整然とした様式の中、明快な和音と軽やかな旋律が快く調和し、親しみ易い作風となっています。本曲は、ソナタ形式の第1楽章アレグロ、技巧的な第2楽章主題と変奏、優美な第3楽章メヌエットの3つの楽章からなり、ギターの第2黄金時代と呼ばれるサロン音楽華やかかなりし頃の調べを良く伝えています。

四重奏曲ニ長調 op.128

C. ムニエル (1859-1911)

ガロ・ムニエルは、イタリアにおけるマンドリン音楽の父と言われ、独奏者としても作曲家としても有名な音楽家で、マンドリンの普及に大いに力を尽しました。1898年第1次4部合奏団を組織し、この合奏団の為に作曲した独創的な3つの

四重奏曲(ニ長調・ハ長調・ト長調)は、今日でも至宝とされ、屢々演奏されております。

此等は、第1・第2マンドリン・マンドラ・マンドチェロの4部編成が原曲とされるが、別にマンドチェロの代りに低音部をギターとした編成が、作者自身により作られております。(しかし他の3パートは全く原曲のままに変化させていません) ムニエルは原曲編成の場合は、マンドリンの名手でありながら必ずマンドチェロを受持ち、ギター編成の場合には、当然第1マンドリンで演奏したといわれています。

このニ長調は、3曲の内でも最もメロディーが美しく、好んで演奏されておりますが、今夜は……一つの試み……として原曲編成にギターを加えた5重奏とし、音色の変化による効果を期待して見ました。

第 3 部

「劇場支配人」序曲 K.486

W.A.モーツァルト(1756-1791)

1幕ものの音楽つき喜劇として、モーツァルト1786年の作品、彼自身の作品カタログには……「劇場支配人 シューンブルンの為のコメディと音楽、序曲とアリア2曲、三重唱1曲、ヴォードヴィル(軽喜劇)」……と書かれています。ベルウィン・ミルズ出版のスコアで58頁の小さな作品の割に、序曲は堂々とした大きな構えをもち、清新でしかも明るく流れるプレストは、これから始まる喜劇の気分をかもし出すかの様です。

尚この喜劇は現在では殆ど上演されず、この序曲のみが残されております。

コンチェルト(シンフォニア) 田園風

A. ヴィヴァルディ(1677-1741)

アントニオ・ヴィヴァルディの曲は、ギター協奏曲・マンドリン協奏曲・「四季より…春」などが度々演奏されておりますが、この曲は殆ど演奏されていないので、今回選曲して見ました。3楽章よりなる小さな交響曲で、作者の曲想を忠実に再現する為に、第1楽章プレストと第2楽章アダージョはZUPF奏法(トレモロなし)で演奏します。

ペルシャの市場にて

A.W.ケテルビー(1875-1959)

イギリスの作曲家アルバート・ウィリアム・ケテルビーが書いた描写曲の中で、最も有名な代表作で、此の外には「修道院の庭にて」「僧院の庭にて」「イタリアのたそがれ」など、異国情緒に満ちたものがあります。この曲も同様で……隊商が近づいてくる-市場の乞食たち-女王の到来と出発-奇術師-蛇使い-太守のお通り-そして隊商は再び旅を続け市場は元の静けさに戻る……情景を眼の前に浮び上がらせてくれます。今度は市場の様子を歌に作り男性合唱をつけて演奏いたします。(作詩は現OSTメンバー 高田三九三氏です)

第 4 部

グランドファンタジー 麥 祭

M. マチョッキ(1872-1955)

マリオ・マチョッキはイタリアに生れたがフランスに帰化したので、その作風もフランスの香りがつよく、1905年パリで創刊されたマンドリン・ギター機関紙エストゥディアンナは、事実上彼の主幹する処で、その為かなり多くの作品を発表した多作家でありました。「歎きの天使」とこの「麥祭」が代表作と言われております。「プレクトラムとコーラスの為のグランドファンタジー(大幻想曲)」という副題を持つこの曲の第1楽章「黎明」は、明け行く夜と輝かしい陽光を画き、第2楽章「楽しき目ざめ」では、教会の鐘の音が収穫祭の朝の村人の心を勇み立たせ、第3楽章「麥の歌」は、ミサを終えた若者達が広場に集って歌う田園情緒豊かな古風な民謡を表し、第4楽章「祭のあと」は、倦むことなく語り合う村人の漸く立ち去った後に、若者達は互に手を取り合い、原に野に森に、又麥の歌をうたい続ける。……………第3・第4楽章の合唱は高田三九三氏が翻訳されたもので、今日ではこの訳詩が斯楽で定着しています。

立て若者よ 心は勇み眼は輝けり とり入れを祝わん
麥は実りて 大地をおほいぬ 麥は実りて北風になびく
いざ行かん 鎌を手に取り とり入れせん 時は来れり
立て共に歌わん ほがらかに 声を合わせて
見よ日は昇りぬ 大自然はさわやかに澄み渡れり

(以下略)

